H22.9.22.(水)

眼底検査で発症予測

心筋梗塞や脳卒中、認知症も

精度高め予防の一役に

失明につながる糖尿病網膜症や緑内障、加齢黄斑変性症など眼病の診断に欠かせない眼底検査。近年、心筋梗塞や脳卒中などの生活習慣病や認知症の発症予測、予防に役立てようという動きが出てきた。近い将来、目を見れば発症の危険度がピタリと分かる時代が来るかもしれない。

眼底検査とは、瞳孔の奥にあって光を受け取る細胞が並んだ網膜の血管や視神経の状態、出血の有無などをカメラを使って調べる検査だ。眼科医が行う検査は健康診断などで使われる簡易型と異なり、広範囲の眼底を観察するために点眼薬で瞳孔を広げる。このため検査時にややまぶしく感じるが、外来で安全にできて痛みもない。短所は視界が2、3時間、ぼんやりすることぐらいだ。

内臓のぞき見

本来は目の病気を調べるのが目的だが、網膜は発生学的に脳の一部が成長したもの。山形大医学部の山下英俊教授（眼科学）は「体を切り開かないで、内臓の血管をのぞき見ることができるのは網膜だけ」と話す。心筋梗塞や脳卒中などは動脈硬化が原因だが、動脈硬化は心臓や脳だけでなく全身に及ぶことから、網膜の血管が動脈硬化の状態を反映しているというわけだ。

眼科で眼底検査を受けて「高血圧ですね」「糖尿病が進んでますよ」などと言われたことがあるかもしれない。もともと糖尿病の診断基準は網膜の血管が壊れて網膜症になる血糖値を定めたもので、網膜の状態と糖尿病とは密接な関係があることが知られている。最近になって、心臓病や脳の病気などの発症リスクと眼底所見の関連についてのデータが世界的に集められてきた。

眼底検査では、動脈が一部で細くなっているか、動脈と静脈が交差しているように見える交差現象があるか、網膜に出血があるか、網膜下に血管が新生しているか、などが着眼点となる。

山下教授によると①網膜出血があると10年後に心臓病で死亡するリスクが約2倍②血管の新生を伴う加齢黄斑変性症があると5年後に脳卒中を発症するリスクが約2倍③動脈が細くなっていると5年後に高血圧を発症するリスクが約1・6倍―といった研究結果が内外で報告され、発症予測の可能性が示された。

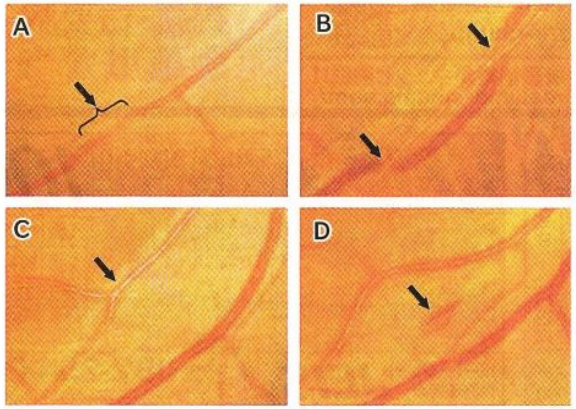
認知症でも、関連を指摘する報告は相次いでいる。脳脊髄液で満たされた脳の空間である脳室が拡大すると脳血管性認知症やアルツハイマー型認知症を発症するリスクが高まることが知られているが、網膜出血や交差現象は脳室拡大のリスクを約2倍高めるという。また、進行した加齢黄斑変性症の患者では、アルツハイマー型認知症のリスクが約2倍になったとの報告もある。

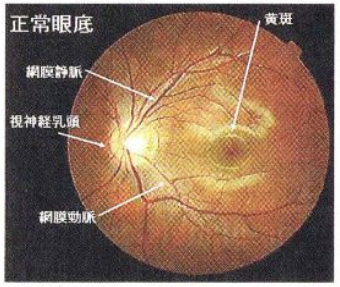
日常臨床にも

今後の課題は、眼底の病状がどの程度進行していると発症リスクがどのくらい高まり、それが個々の患者にどのように当てはまるかを見極めることだという。現在のところ、個々人の眼底所見の差を定量的に示すことが困難で、高い予測精度となって現れてこないという問題点がある。

山下教授は「今は疫学研究のレベルだが、予測精度を高めて日常臨床にも役立つ水準にもっていきたい」と話し、将来的には眼底検査のデータを数値化して発症リスクを内科などに提供することで、病気の予防に貢献したいとしている。

眼科医で構成する日本眼科医会は「現在でも、眼科専門医であれば高血圧や心臓病などの危険性は大まかに判断できる。眼病の早期発見のためにも、40歳を超えたら年1回は眼底検査を受けてもらいたい」と呼び掛けている。





㊤異常な眼底所見の例。Aは動脈が局所的に細くなっている。Bは交差現象。Cは動脈の壁が厚くなったため明るく写っている。Dは網膜からの出血（メルボルン大の川崎良博士提供）
㊦正常な眼底
（山形大医学部の山下教授提供）

けんこう掲示板

◆市民のためのがん講座　26日午後2時～4時15分、広島市中区の市ちづくり市民交流プラザ。広島大大学院の大[illegible]秀樹教授が「肝細胞がんと肝臓移植」、広島平和[illegible]リニックの広川裕院長が「肝臓がんの画像診断」、放射線治療」について講演。受講料1300円。NPO法人がん患者支援ネットワークひろしま☎082（249）1033

◆五福の会健康教室　29日午後1～2時、広島市西区の荒木脳神経外科病院。同病院内科診療の渡辺健一部長が、インフルエンザを中心に感染症について講演。無料。同病院地域連携室☎082（272）1114

うつ病の治療を始めになった春、休んで午前中だけ出ることが、自宅療養の毎日が、自宅療養の毎日な感じ」に思えるようことがポイントだっ。

恐る恐る出社し、をしながら体を慣た。3カ月すると、